



Title	カナダ征服戦争の顛末とその意味 : カナダ征服戦争250周年記念論文集を手がかりに
Author(s)	阿河, 雄二郎
Citation	アジア太平洋論叢. 2019, 21, p. 3-25
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/100137
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

カナダ征服戦争の顛末とその意味

——カナダ征服戦争250周年記念論文集を手がかりに——

阿 河 雄二郎*

1. カナダ征服戦争250周年を迎えて

七年戦争（1756～63年）は、戦場がヨーロッパだけでなく、アメリカ、アフリカ、アジア（インド、フィリピン）に及んだことで人類史上初の「世界大戦」といわれる。そのうち、北米大陸を舞台におこなわれた戦争は、ヨーロッパの戦争より2年早い1754年に始まり、1759年のケベックの陥落、1760年のモントリオール陥落をもって終了した。この戦争はヨーロッパとはやや異なる性格を有しているため、イギリス史では「フレンチ・アンド・インディアン戦争」とも呼ばれている。本稿では、1955年のフレゴアの著作のタイトル名から定着した用語となった「カナダ征服戦争」と呼ぶことにする。筆者は、1608年にシャンプランがケベックを建設して以来、18世紀には北米大陸の過半を占めたフランスの植民地であるヌヴェル＝フランスの展開のさまに関心を抱いているが、本稿はその一つとして、ヌヴェル＝フランスの命運を決したカナダ征服戦争を焦点に、この戦争が実際にどのようにおこなわれたか、どのような形で決着がはかられたか、さらに、この戦争がどのような意味をもっているか、を検証したい。

カナダ征服戦争をめぐっては、戦争の直後から英仏でさまざまな議論がなされ、かなりの著作物が刊行されてきた。総じて両国の歴史書は、激しい戦闘を繰り広げた指揮官や兵士たちを称え、英雄視する傾きがある。しかし、実証研

* 大阪外国語大学名誉教授

究のレベルで大きな転換点となったのは戦争終結200周年にあたる1959年だった。この年、カナダの研究者であるステーシィとエクルズは、兵員・物量にまさり、智略に長けたイギリスがフランスを終始圧倒したという通説を覆し、とくにケベック攻略の立役者であるイギリス軍司令官ウルフの作戦は無謀(risky)であって、イギリスの勝利は偶然にすぎず、フランスに十分な勝機があったと主張した。逆説的には、フランス軍を率いたモンカルム将軍が冒した失策にイギリスは救われたのである。その是非は後ほど検討するとして、今日ではウルフやモンカルムの評判は必ずしも芳しくない。

その後、カナダ征服戦争については政治、軍事、経済、社会、先住民など多方面にわたって研究が蓄積され、戦争の背景にも目が向けられてきた。ただ、ここでも新たな一段階を画したのは、2009～10年に各地でおこなわれた戦争終結250周年の記念行事だった。それに合わせて古い戦争の記憶が呼び覚まされ、戦争にまつわる歴史書、戦記、伝記が相次いで出版された。とくに興味深いのは、カナダ、フランス、イギリス、アメリカ合衆国などの歴史研究者が一堂に会し、偏見や臆見に捉われないで、戦争をトータルに見直そうとする国際的な研究集会がいくつか開催されたことで、その結果、筆者の手元にあるだけで以下の論文集が公刊された。

- ① P.Buckner & J.G.Reid (ed.), *Remembering 1759 : the Conquest of Canada in Historical Perspective*, Toronto, 2012.
- ② P.Buckner & J.G.Reid (ed.), *Revisiting 1759 : the Conquest of Canada in Historical Memory*, Toronto, 2012.
- ③ B.Fonck et L.Veyssière (dir.), *La guerre de Sept Ans en Nouvelle-France*, Septentrion, 2011.
- ④ B.Fonck et L.Veyssière (dir.), *La fin de la Nouvelle-France*, Paris, 2013.
- ⑤ B.Fonck et L.Veyssière (dir.), *La chute de la Nouvelle-France : de l'affaire Jumonville au traité de Paris*, Septentrion, 2015.
- ⑥ S.Imbeault, D. Vaugois et L.Veyssière (dir.), *1763 : le traité de Paris bouleverse l'Amérique*, Septentrion, 2013.
- ⑦ L.Veyssière, P.Joutard et D.Poton (dir.), *Vers un nouveau monde atlantique : les*

traités de Paris, 1763-1783, Rennes, 2016.

⑧ J.Mathieu et S.Imbeault, *La guerre des Canadiens, 1756-1763, Septentrion, 2013.*

このなかで、①②はカナダの英語系の歴史研究者を中心にバックナーとレイドが編集した論文集で、1759年のケベック陥落がその後どのように記憶されイメージされていったかが論じられている。また、⑥⑦はイギリスによるカナダ占領後のヌヴェル＝フランスの最終的な帰属を決したパリ条約の交渉過程や条約締結後のカナダの状況を考察している。さらに、⑧はカナダのフランス語系の研究者が、戦争に巻き込まれたカナダ人と先住民の苦難の歴史を叙述したものである。もっとも、カナダ征服戦争それ自体の解明を目指す本稿にとっては、③～⑥の4冊の論文集がとりわけ重要である。それらは、カナダのフランス語系の研究者と、パリ東郊ヴァンセンヌに所在するフランス国防省資料館（SHD）、並びにパリ第4大学の研究者を中心とした共同作業による報告集である。これらの論文集には合計で92点（ただし、④⑤には論文の重複掲載があるので、それを差し引けば69点になる）の論文が収められ、戦争の経緯はもとより、ヨーロッパの政治・軍事情勢、戦争に参加した兵士の状況、カナダ人や先住民の戦争への態度など、戦争のほぼすべてが考察の射程に入っている。

したがって、本稿では③～⑥の論文群を中心とし、それに近年の研究を参照しつつカナダ征服戦争の概略を描くことにしたい。紙数の関係上、もちろんそのすべてを扱うわけにはいかないので、この小稿では戦争をいくつかの段階に分け、それに見合って重要と思われる論文をピックアップする形で議論を進める。ここで設定する諸段階は、(1) 戦争に向けての英仏両国の取り組み、(2) フランスのカナダ防衛戦略とその実態、(3) ケベックとモントリオール攻防戦の実相、(4) パリ条約の交渉・締結の経緯、である。

2. 七年戦争＝カナダ征服戦争に向けてのイギリスとフランスの取り組み

七年戦争は「第二次英仏百年戦争」と呼ばれる英仏のヘゲモニー抗争のなかでもっとも重大な局面であり、イギリス史の通説はこの戦争を「ブリテン帝国」

形成上の画期とみなしている。論文集のうちでも、そうした理解は、ブラムウェル、ブラック、サボーなど主に英米系の研究者に踏襲されている。ブラムウェルによれば、イギリスでは中世に続く新たな百年戦争という意識が「Monitor紙」のような当時の新聞の論調にも認められ、国民意識の急激な高まりを背景に、ヘゲモニーを賭けた戦争が世界規模で展開された。イギリスが「ブリテン帝国」を樹立するには、なお「フランス革命＝ナポレオン戦争」(1793～1815年)を待たねばならないとしても、その過程でイギリスは全世界を視野に収めた外交権を手に入れたのである。

とはいえ、そうした見方は後付け的な解釈であって、より詳細に検討すると、通説とは異なる相貌をみせてくる。そもそも当時のイギリス政界は海洋派と大陸派に二分され、必ずしも主戦論が主流を占めたわけではなかった。王家の出身地であるハノーファー侯国の存立を念じるジョージ2世の意を受けたニューカスル政権は、フランスとの争いを極力避けようとした。18世紀前半の英仏関係は概して良好で、それを前提に両国の飛躍的な海外発展があったのである。この流れを開戦へと導いたのがピット率いる海洋派だったが、ブラックによれば、開戦当初のピット政権はさしたる展望を描けないでいた。カナダ方面の戦いは正規軍の投入にもかかわらず旗色が悪く、それにヨーロッパの戦いを加える両面作戦に政府は大きな不安を抱いていた。ブラックはイギリスの七年戦争の勝因を、潤沢な海軍予算、質量ともに優れた艦船、効率的な海軍行政、優秀な指揮官といった海軍の総合力に帰しているが、それはあくまで結果論にすぎない。

一方のフランスはどうだったのだろうか。七年戦争の原因はシュレージエンの領有をめぐるオーストリアとプロイセンの抗争であり、オーストリア継承戦争(1740～48年)の続編という性格をもっていた。このローカルな戦いが世界大戦へと拡大したのは、両国をそれぞれ支援するフランスとイギリスが、両国の開戦に引きずられる形で宣戦布告を余儀なくされたからだった。国際社会での孤立を恐れていたプロシアは、オーストリアとの近い戦争を予想して、1756年1月、仇敵のイギリスとウェストミンスター協定を結んだ。その動きを察知したオーストリアの宰相カウニッツは、長年の宿敵だったフランスとの和解を

目指し、同年5月にヴェルサイユで攻守同盟を結んだ。そうした合従連衡が「外交革命」の真相である。この同盟関係に基づき、フランスはオーストリアに軍隊派遣と資金援助を約束した。『七年戦争史』の著作のあるサボーは、この緊迫した国際情勢が第一次世界大戦前夜のそれとよく似た構図だったと力説している。

イギリスと同じく、フランスの世論にも主戦論と和平論があったが、当時のヨーロッパ政治世界の通念である勢力均衡を崩し、海洋支配を強めるイギリスへの批判は大きく、とくにヌヴェル＝フランスをめぐっては、アカディアとオハイオに対するイギリスの軍事圧力を懸念する声が高まっていた。オーストリア継承戦争が終わったあと、アカディアでは宣戦布告のない戦いが継続し、イギリスの支配に反抗的な人々の追放劇が始まっていた。

にもかかわらず、政府当局がこの警鐘にあまり耳を傾けなかったのは、厭戦気分に加えて、フランスの関心事がヨーロッパの主導権確保にあり、植民地問題は付録にすぎなかったからである。また、当時の国際法のルールでは、戦後処理の一環としての領土交渉は、占領・支配の有無に関係なく、まずは戦前の状態に戻した上で交渉する方式、すなわち、「敵対関係以前の状態」(*statu quo ante bellum*) という方式が一般的だった。ちなみに1745年イギリスに占領されたアカディア方面（ロワイヤル島）のルイブールは、1748年のアーヘン条約によりフランスに返還されている。結局のところ、フランスが植民地にあまり派兵しなかったのは、必ずしも植民地への無理解とか、海軍力の弱さからではなかった。むしろフランスの戦略は、プロイセン軍とそれに協力してハノーファー守備に派遣されるイギリス軍を正面から撃破することに注がれた。植民地の方は、たとえ一時的に占拠されても、ヨーロッパ戦線の圧勝によって回復できるという計略である。換言すれば、「植民地の喪失は、(ヨーロッパ)大陸の戦争で償いをつける」(サボーの指摘) という鉄則がフランスの一貫した態度だった。

不思議なことに、このようなフランスの楽観的な戦略は、軍事情勢が悪化しても変更されなかった。1757年11月にロスバッハ、12月にロイテンでフランス側が大敗を喫し、1758年7月にはルイブールまで陥落し、形勢に自信をなくし

た大臣たちが相次いで辞任するなか、オーストリア駐在大使としてカウニッツと盟友関係を深めていた主戦派のショワズールが12月に外務卿に就任し（1761年に陸軍卿と海軍卿を兼務し、事実上の「首席大臣」となった）、戦局の転換をはかるべく1759年7月ドイツのミンデンで決戦を挑み、イギリス本土への上陸作戦さえ企てた。これらの作戦は悉く失敗に帰し、フランスはイギリスのカナダ征服戦争を傍観するばかりとなる。

それでも、プスーやゲルトン、さらにルッジウが考察したショワズールの大局観、ないし対イギリス観は一考に値する。第一点は、フランスが長期戦に持ち込めば、人口や資産といった総合力で劣るイギリスは、戦争で利益の見込みがないことを自覚し、いずれ休戦に応じるだろうとの思い込みである。そこには、利に敏感な「イギリス＝商業大国」のイメージがある。ショワズールには、富や物産の乏しいカナダの領有を声高に主張するピットの真意が理解できなかった。和平に傾いた1761年夏、彼はイギリス使節に対して次のように述べている。「ピット閣下がカナダの獲得にそれほど執着していることに私は驚いています。その土地はあまりに人口が少ないので、あなた方に決して危険とはなりません。わが手にあつてこそ、あなた方の植民地（＝英領北米植民地）を従属させておくのに役立つのです。カナダが割譲されたその日、植民地は従属から解放されるでしょう」。

この発言の後半部分と関連する第二点は、イギリスによるカナダの占領はかえってイギリスの未来を危うくするとの見立てである。その問題については、すでに1748～51年、この地を探訪したスウェーデンの生物学者カルムが植民地の力を実感し、「イギリス政府には、フランスの存在が13植民地を服属させる最良の手段だと信じる十分な理由がある」と述べていた。おそらくカルムと共通の認識の上に、1765年ショワズールは次のような「意見書」をルイ15世に書き送った。「革命が起こるとすればアメリカでしょう。私がそれを見ることはおそらくないでしょうが、革命は、ヨーロッパでもはや恐れるに値しないほどにイギリスを弱体化させるでしょう。・・・アメリカにおけるイギリスの植民地の拡大は、これら植民地のイギリスからの分離を引き起こすでしょう」。この記述はカナダ征服戦争後に提出された事後的な見解にすぎないが、フランスの脅威が

なくなると、巨大化した英領植民地はやがて本国に反旗を翻し、ついには「(独立) 革命」を引き起こし、「(イギリス) 帝国の解体」につながるとの意味深長な予言であり、今日では卓見との評価も高い。いずれにせよ、七年戦争の後半戦は、ショワズールの世界戦略をもとに遂行されたのである。

3. フランスのカナダ防衛戦略とその実態

カナダ征服戦争が始まる以前から、イギリスは英領アカディアのハリファックスを中心に艦隊と数千人の正規軍(=陸軍)を展開していた。1748年のアーヘン条約以後、アカディアやオハイオの境界線をめぐって、フランスとのあいだに交戦状態が続いていたからである。1754年5月、(のちに初代アメリカ合衆国大統領となる)ワシントンが率いるヴァージニア民兵隊がフランス海軍士官ジュモンヴィルたちを殺害した事件に端を発して戦いが本格化すると、イギリスはヨーロッパの情勢を睨みながら兵力の増強をはかり、1755年段階で約1万人、戦況が好転した1758年以後は2万人以上の正規軍を送り込んだ。これにニュー＝イングランドなどの民兵を加えて、イギリス軍は約5万人に膨れ上がったのである。この強大なイギリス軍に対抗するフランス軍はどれほどいたのだろうか。

レピーヌなどによれば、当初、ヌヴェル＝フランスに駐屯するフランスの正規軍は、沿岸島嶼部にあるルイブールの守備隊約1,500人にすぎなかった。大陸部には戦時に派兵される程度だった。イギリスの侵攻が現実味を帯びてきた1755年、ようやく政府はこの地域の防衛策に着手した。ヌヴェル＝フランス総督にカナダ生まれで知名人のヴォードルイユ、同じく軍司令官にヨーロッパ戦歴の豊かなディスカウが任命され、6個連隊4,000人の正規軍がカナダに派遣されたのである。近年はカナダ征服戦争を正確に記録・記憶しようとする動きが顕著で(たとえば2006～09年の「モンカルム計画」)、その一端を紹介するフルニエの数値を借りると、この戦争期を通じて、フランスは11個連隊9,715人を送り出した。ただし、航海の途中、イギリス海軍に拿捕された船舶に乗り合わせていた1,837人が捕虜となったので、実際にカナダに上陸できたのは7,878人

だった。それでも、最終的に正規軍の戦病死者が1,909人にのぼったことは、カナダでの熾烈な戦いを示唆している。

正規軍を補助したのは、「民兵」(milice)、「海軍遊撃隊」(compagnie franche de la Marine)、先住民兵だった。1669年に創設された民兵は、地方総督の管轄のもと、地域の自治や防衛を担う存在で、16～60歳の成人男子が居住する地区単位で随時徴集された。彼らは原則的に1年に1度おこなわれる軍事訓練に自前で調達した武器を手に参加する義務があった。1755年以降の動員数は12,000～15,000人に達したといわれる。人口が6～7万人のカナダにとって、民兵制度は大きな負担となっていた。やはりルイ14世時代に起源をもつ海軍遊撃隊は、植民地の治安と先住民の管理を司る海軍の歩兵部隊で、主に各地に点在する城砦や交易所(poste)に配属された。元来、この部隊はフランスからやって来た海軍兵士で構成されていたが、18世紀に入ると、カナダ生まれの人々も多く採用された。彼らは先住民と緊密な関係にあったので、軍事的な存在感も徐々に高まり、1750年代には約3,000人を数えている。

そのほか、先住民の諸部族から派遣され、フランス軍と行動を共にした数千人の先住民兵を忘れてはならない。1701年の「モントリオール和」により、フランスは宿願だったイロクワ族との戦争を終わらせ、先住民との和平を実現するとともに、彼らの一部を軍隊の道案内、偵察、兵站などのため雇用した。彼らは小規模な戦闘や、イギリス軍との正面衝突をも厭わず、「頭皮剥ぎ」や「野蛮な関の声」でイギリス軍兵士を戦慄させた。その悪名はヨーロッパ中に知れ渡っている。もっとも、マクロードは、先住民兵はフランス軍と協力関係にあったにすぎず、自らの損得勘定をもとにフランス軍の傍らで「並行した戦い」(guerre parallèle)をしていたと述べ、その自立性を強調している。ケベックの陥落以降、フランス側に与する先住民兵は激減し、先住民の大半は中立を保った。以上、フランス軍は最大に見積もっても2万人に満たず、イギリス軍の3分の1とみてよいだろう。この劣勢をどのように克服するかが課題だった。

フランスは二通りの戦術を用いた。その一つはシャンプラン以来の伝統的なもので、本拠地のセント＝ローレンス川からできるだけ遠く離れ、イギリスの支配領域まで深く侵入して急襲する積極策である。これは、兵員が少なく、自

然条件が厳しく、領土が広大にすぎてコミュニケーションが取りにくいヌヴェル＝フランスの特徴を生かした効果的な戦術と考えられており、カナダを知悉する総督ヴォードルイユも得意技としていた。事実、オハイオに進出したフランス軍は、1755年7月モノンガヘラ川の戦いでイギリス軍司令官ブラッドックを敗死させ、同年9月ジョージ湖畔の戦いでは軍司令官ディスカウを失ったものの（彼は重傷で捕虜になった）、イギリス軍と互角以上に戦った。

もう一つは、ディスカウの後継者として1756年5月に着任したモンカルムが構想した戦術である。彼はヨーロッパ流の洗練された近代戦、すなわち、砲列を敷き、戦陣を整え、隊列を組んだ部隊が正面から突撃する「大会戦」(bataille rangée) 方式に慣れ親しみ、ヌヴェル＝フランス流のゲリラ戦を主体とした「小競り合い」(petite guerre) 方式を軽蔑していた。このため、彼は着任早々、軍の方針や指揮権をめぐってヴォードルイユと衝突した。二人は相性がよほど悪かったらしく、相手を非難する手紙や報告書が多く残されており、二人のライヴァル意識が敗因の一つに数えられている。モンカルムから見ると、戦闘の鍵を握るのは正規軍歩兵の強さでしかなく、近代戦の訓練を受けていない補助部隊は頼りにならなかった。ましてや残虐なだけで、協調性に欠け、砲弾を怖がり、攻囲戦に不向きな先住民兵の戦いぶりは論外だった。ちなみに、フランス軍がウィリアム・ヘンリ砦を攻略したとき、名誉ある撤退を認められたイギリス軍兵士の隊列に襲いかかり、数百人を殺害・拉致した先住民兵の乱暴狼藉に、モンカルムは顔を顰めるばかりだった。彼の作戦の理想形は、戦線をイギリスとの紛争地域からセント＝ローレンス川方面に後退させ、地の利をえたケベックでイギリス軍を一掃することであった。

しかし、実戦のレヴェルでみると、モンカルムはヨーロッパ流とヌヴェル＝フランス流の戦法を折衷した柔軟な作戦を用いている。カナダの大自然に触れ、彼は持論を修正したのだらうか。実戦には多くの民兵や先住民兵が加わった。その一方、戦闘は数千人単位と大きくなり、何よりも大砲の威力が増していた。フォンクやヌリクは、ヌヴェル＝フランスの戦争がヨーロッパの戦争に近づいていたと断じている。ともあれ、1756年7月オスウィーゴの勝利、1757年8月ウィリアム・ヘンリ砦の攻略、1758年7月カリヨンの勝利という具合に、モン

カルム麾下のフランス軍は善戦した。ただモンカルムが本国から与えられた密かな任務は、イギリス軍を打ち負かすことではなく、降伏をできるだけ先に延ばすことだったといわれる。ヨーロッパでの戦争が終わるまでフランス軍がカナダの地に一步でも踏み留まっていれば、カナダが存続する目が残されるのである。イギリスとの全面衝突が近いことを察知したモンカルムは、1758年秋から全軍をセント＝ローレンス川周辺に撤収させた。彼は最初に描いていたカナダ防衛戦略に立ち戻ったのである。

なお、シャリーヌの考察を手がかりに、フランス海軍の動きを一瞥しておきたい。18世紀中葉の海軍力を比較すると、イギリスはフランスの2倍以上の艦船と水兵を有し、北米方面でニューヨーク、ボストン、ハリファックスの港を常時使用できたが、フランスはルイブールのみで、ケベックは冬季（11月～4月）にセント＝ローレンス川が凍結し航行不能になるため、双方の戦力差は歴然としていた。この海域では、兵士や補給物資を満載したフランスの船舶をイギリス艦隊が「封鎖線」で待ち受けて拿捕する消耗戦がおこなわれた。シャリーヌはこれを「大出血」（hémorragie）と形容している。1757年以降、イギリスは国際法を無視して捕虜の本国帰還を認めなかったため、2万人ほどのフランス人が終戦まで各地に拘留された。ルイブール陥落とともに、フランスは通常の本国＝カナダ間の通信手段さえ失った。1758年末、モンカルムの使者としてパリに渡り、援軍を要請したブーガンヴィルに対し、海軍卿ベリエの「母屋が火事のときに厩舎になど構ってはおれない」との冷淡な回答が知られている。ブーガンヴィルが3隻の艦船と400人の兵士を率いて1759年5月10日ケベックに辿り着いたのが、フランスからの最後の補給となった。

4. ケベックとモントリオール攻防戦の実相

カナダ征服戦争の最終局面であるケベックとモントリオールの戦いを簡単に振り返っておこう。1759年1月ピットは5万人の兵力をヌヴェル＝フランス攻略に投入した。総司令官はアマースト将軍である。そのうち、ケベック攻略を命じられたのはルイブール攻略で勇名を馳せたウルフで、彼は9,000人を率い、

戦列艦22隻を含む150隻もの大船団に護衛されてセント＝ローレンス川を遡上した。一方、モンカルムは、モントリオールなどの要衝に残留させた2,000人（レヴィが指揮）を除く正規軍4,000人のほか、民兵など約1万人の補助部隊を合わせてケベック防衛に専念した。

両軍の交戦は、イギリス軍がケベック前面のオルレアン島に達した6月27日から始まり、7月31日のケベック東郊ボーポールの激戦（フランス軍の勝利）を経て、9月13日のケベック西郊アブラム平原（現在は「戦場公園」という名前になっている）の戦いまで2カ月半に及んだ。この日の戦いでイギリス軍は圧勝したが、ウルフもモンカルムも戦死している。9月18日にケベックが陥落したあとも両軍の睨み合いは続き、翌1760年4月28日に再びアブラム平原に近いサント＝フォワで激突した。この戦いに勝ったフランス軍はケベックを包囲したが、5月にイギリスの援軍が到着したため、モントリオールに引き上げた。やがてイギリス軍は三方からモントリオールに迫り、ついに9月8日モントリオールが降伏して6年間にわたるカナダ征服戦争に終止符が打たれたのである。

この攻防戦は本論文集の最大の関心事で、多くの論文が触れている。その全体的な流れを掴むにはカンパールの考察が参考になる。しかし、本節で注目したいのは、論文集の編集で大きな役割を果たしたプスーとヴェシエールの問題意識である。近世フランス史の碩学プスーは早くからカナダ史に関心をもち、征服戦争にも積極的に発言してきた。彼は本論文集に4点の論文を寄せ、そのうちの2点は経済史の観点から、短・中期的に見て、あまり利益の期待できないカナダの領有にイギリスがなぜ拘ったのか疑問を呈している。実際、アメリカ独立戦争で敗れた約5万人の「王党派」(royalist)の人々のカナダ移住を除けば、カナダの開発が本格的に始まったのは1820年代にすぎない。とはいえ、私見によれば、プスーがもっとも重視したのはケベックの戦いそのものだった。ステーシィやエクルズの研究に刺激された彼は、戦闘の顛末を改めて精査した結果、ウルフの作戦は思慮を欠いた奇策であって、やはりフランスの勝利以外にありえないとの結論に達した。実際にそうならなかったのは、フランス側に致命的な失策があったからだだった。

プスーはフランスが勝つチャンスが3度あったと慨嘆している。最初はイギ

リス軍の精鋭4,500人が突如アブラム平原に出現したときである。ウルフを称える通説は、9月13日未明、イギリス軍がケベックのすぐ西側にあるフーロンの入江に密かに上陸し、崖を駆け上がってアブラム平原に進出した作戦に彼の並外れた資質や天分を見出している。ところが近年の研究によれば、ウルフをこの作戦に駆り立てたのは、冬が迫り、10月末までに本国に向けての軍の撤収作業を控えて、何としても戦果をあげたいとの野心や焦燥感であって、成算があつてのことではなかった。したがって、不意を突かれたとはいえ、モンカルムはこの挑発に乗らず、そのままケベックに籠城し、近くに出払っていたブーガンヴィル軍1,500人の帰陣を待つて反撃すればよかった。延引策さえとっておれば、弾薬や糧食の尽きかけたイギリス軍は本国への退却を余儀なくされたはずである。

2度目はモンカルム戦死の直後で、絶望したケベック市民の降伏要請はあつたにせよ、ラムゼー（ケベック総督）が9月18日に降伏したのは早計にすぎた。モントリオールからレヴィ軍が救援に駆けつけていたからである。レヴィは「攻撃も侵入もされてないのに降伏するとは前代未聞」と憤慨している。3度目は1760年4月28日、レヴィ軍がケベック近郊のサント＝フォワの激戦を制したときで、レヴィ軍は大砲の到着を待たないで、すぐさまケベック市内に突入すべきだった。ケベックの城壁は頑丈な造りではなかった。結局のところ、3度もの絶好機を逃したフランスに勝ち目はない。プスーは、その原因をフランス軍内部の連携の拙さと、モンカルムの「愚かな」判断ミスに帰している。

この論文集に4点もの論文を発表しているヴェシエールも、プスーと共通する問題意識をもち、モンカルムとヴォードルイユの対立を軸に、両者の評価に触れ、モンカルム伝説生成のプロセスを追跡している。カナダでは、戦いに敗れたモンカルムへの風当たりは強く、カナダの人々の生命や財産を守るために奔走した美談があるヴォードルイユの人気の高い。ところがフランスは逆で、ヴォードルイユの優柔不断が敗因の一つとされ、彼はフランスに帰国後バステューユに収監された。それに較べると、モンカルムは悲劇の将軍扱いで、19世紀には「殉教者」とか「祖国の英雄」として顕彰されるようになる。

ヴェシエールによれば、モンカルムの死に劇的な場面は何もなかった。戦い

で致命傷を負った彼はケベック市内に運ばれ、翌日未明に亡くなった。葬儀は寂しく、彼の棺はウルスラ会女子修道院内に落ちた砲弾でできた穴に埋められたという。死に臨んでの言葉は「ケベックの不幸を見ないで死ねるのは幸せだ」で、最高指揮官の発言として軽すぎる。あるいは、万一の場合の指揮権をヴォードルイユに委ねていたのだろうか（そのほか、モンカルムはケベックの降伏をラムゼーに命じていたとの説もある）。そのヴォードルイユも、敗戦の報に接するや、大急ぎでケベックを離れ、敗残兵を収容しつつモントリオールを目指した。そのため、はっきりとした指示を受けていなかったラムゼーが、ケベックに残留した軍幹部たちと協議の末、降伏を決めたのは、やむをえない措置だった。付記すれば、モントリオールの攻防戦をめぐるでも、ヴォードルイユはレヴィの徹底抗戦論を退け、イギリス軍に無条件降伏する道を選んだ。

このようなやや無責任で識見に欠ける最高指揮官を英雄に仕立てたのは、レヴィ、ブルマックといった歴戦の勇士ではなく、彼らの同輩で、のちの『世界周航記』で名高いブーガンヴィルだった。若くして科学者・宮廷人としての名声を築いていた彼は、モンカルムの推挙で遠征軍の副官に抜擢された恩義を忘れなかった。1760年末、意外な速さでカナダ（モントリオール）からフランスに送還された彼は、早速、モンカルムの名誉回復に取りかかった。アカデミーにモンカルムの顕彰を呼びかけ、翌年3月イギリスのピットにモンカルムの墓碑の設置を認めるよう手紙を書いている。

ただ、この華々しいキャンペーンには、ブーガンヴィル自身の名誉挽回も秘められていた。というのも、ケベックの戦いでトロワ＝リヴィエールとケベック間の兵站・警備部門を担当した彼は、イギリス艦艇の動きに幻惑されて、フーロンの入江へのウルフ軍の上陸を見落としたばかりか、ケベックの戦闘に間に合わず、また、翌年のモントリオールの戦いでもノワ砦の守備を独断で放棄する醜態を晒していたからである。彼はモンカルムを称えることで、不甲斐ない臆病者との世評を払拭しようとしたのだろう。プーはこの自己弁護的なブーガンヴィルの言動に「情状酌量の余地」を認めているが、筆者には寛大にすぎると思われる。なお、ヴェシエールは、18世紀末にモンカルムの死の情景がヴィジュアル化され、廉価な版画が広く流布したことに注目しているが、同時

期のイギリスでウルフの死の画像が評判になっていたのと同じ現象である。18世紀は国民的な英雄を画像化した戦争画が流行する時代だった。

本節はプースとヴェシエールの論点をもとに、ケベックの攻防戦を検討してきた。しかし、モンカルムがウルフの挑発になぜ応じたかという根本的な疑問にしても、謎は深まるばかりである。近年のマクロードの著書も、実戦に参加した将兵の記述を駆使しているにもかかわらず、戦闘の様様をより克明に描いたにすぎない。この点では、いつも受け身の戦いを強いられたモンカルムが、初めてほぼ同数のイギリス軍と対峙するチャンスに恵まれたことで、乾坤一擲の勝負を挑んだというのが、筆者の暫定的な解釈である。その限りで、モンカルムの応戦は自然な流れだったが、戦闘は完敗だった。それはともかく、わずか30分の戦闘で正規軍が壊滅状態に陥ったとき、民兵や先住民兵がイギリス軍の側面を衝き、全滅から救ったことを見落としてはなるまい。その事実、この戦争がヌヴェル＝フランスに居住していたフランス系の人々や先住民の死活問題だったことを物語っている。ヌリクは、ケベック攻略を前に、ウルフの命令でイギリス軍が1,400もの民家を焼き払い、略奪した焦土化作戦を「恐怖政治」と表現している。本論文集では、マチュー、アンボーなどが編集する⑥～⑧がこれらの問題に取り組んでいるので、今後の検討課題としたい。

5. パリ条約とカナダの命運

カナダを占領したイギリスは、モントリオール降伏文書に基づいてカナダを軍政下においた。指揮をとったのは、ウルフの副官だったマレーである。その際、カナダ在住者は財産権と信教の自由を保証されたが、イギリス王への忠誠誓約を強要され、それを拒否する者は追放された。その強圧的なやり方は、すでにアカディアに対して実施されていた「臣民化」政策と同じで、のちのカナダ領有の前触れだった。しかし、カナダを含めてヌヴェル＝フランスの行方に決着がつかなかったのは、前述したように、領土の線引きをめぐるルールが二つあり、現状追認の「領土不変更の原則」(uti possidetis) よりも、「敵対関係以前の状態」に差し戻して交渉する方式が優先されたからである。交渉を有利に進

めるには、できるだけ戦果、つまり取引材料となる領土を獲得しておく必要があった。

本論文集では、④～⑥のルシュール、テルナ、メリッソンなどの論考が植民地争奪戦や戦争処理の地政学を扱っている。ショワズール、プララン、ピット、ビュートなどの為政者は、こうしたパワーゲーム（陣取り合戦）に狂奔した。イギリスは1759年にフランス上陸を3度試み、1761年にはブルターニュ半島沖のベル＝イル島を占領した。カリブ海方面でも、1759年にグアドループ島、1762年にマルティニク島を占拠し、フランスのサトウ産業に大打撃を与えた。フランスも1759年に三方からのイギリス上陸作戦を計画したほか、1761年8月にはスペインと「家族協定」(pacte de famille) という大義名分を掲げた、ブルボン王家連合による攻守同盟を結んでイギリスを震撼させた。また、1762年6月から約3カ月間、ニュー＝ファンドランド島を占領したのは、カナダを見捨てていないことをアピールしたものであろう。ただし、戦いはハバナの占領、マニラの占領と、いずれもイギリスに凱歌が上がり、戦争に疲れ果てた諸国に和平への道筋をつけた。

以下、ボワバリーの論文を参考に、パリ条約への歩みを辿っておこう。カナダの降伏後、ショワズールは和戦両様の構えをとった。両国の外交チャンネルは戦時中も途切れなかったので、1761年5月、彼は双方の駐在大使を介して和平案を仄めかした。北米方面に絞ると、アカディアはイギリスに割譲し、カナダとロワイヤル島はフランスが占領しているハノーファー侯領と交換する案で、その際、カナダの割譲に初めて言及した。ピットはこれに満足したが、同時進行中の軍事作戦が成功したため、この提案をご破算にした。それに激怒したショワズールは、英仏間の交渉の内実を外交史上初めて公表してイギリスの理不尽さを世界に訴えるとともに、例のスペインとの同盟でイギリス（とくに戦争政策に批判的な新王ジョージ3世とその側近）に揺さぶりをかけ、10月のピット失脚を誘い水にイギリス（ビュート政権）との和平交渉を再開した。かくして1762年3月から正式に始まった交渉は、7月に両国の特命全権大使の交換、11月にフォンテーヌブローでの予備交渉と進み、1763年2月10日にパリ条約が締結されたのである。ヨーロッパの東部戦線も、同年2月15日のフベル

トウスブルク条約で終戦を迎えた。

それでは、このパリ条約をどのように評価すればよいのだろうか。インドやアフリカでイギリスの支配が格段に強まったのは間違いない。ただ、アメリカに限定すると、ショワズールの主張は概ね了承され、フランスはカナダを犠牲に（ルイジアナもスペインに譲渡された）、カナダ沖合の漁業権と、それを担保するセント＝ローレンス湾入口の2島（サン＝ピエール島とミクロン島）の領有を認められ、マルティニク島やグアドループ島が返還された。彼がカナダの海域に固執した直接の理由は、タラ漁がもたらす経済的利益にあったが、フランスの「海民」（*gens de mer*）を熟達した船員に、さらには水兵にする実地訓練の現場だったことも重要である。タラ漁には、フランス諸港から毎年300隻、5,000人以上が出漁していた。こうして見ると、カナダの割譲は「戦争の掟」でやむをえないので、軍事的に完敗したにしては、損失はさほど大きくなかった。タラ漁とサトウ業の權益を守り抜いた点では、フランス外交の勝利と見る向きもある。逆にイギリスでは、アンティル諸島を手放した政府への批判が強まり、民衆暴動が勃発する事態となった。もっとも、イギリスの海洋派はニュー＝イングランド系とカリブ海系の二つあり、政府はサトウ産業の崩壊を恐れる後者に配慮したのである。

ところで、ルッジウは、パリ条約を契機にショワズールが植民地政策を大きく転換させたことに注意を促している。これまでのショワズールは、いささか強引な勢力均衡論者で、陸海軍の増強による「対英復讐」（*revanche*）路線が強調されてきた。しかし第2節で紹介したように、ショワズールの言動は深い読みと裏打ちされていて、その世界観や理念像を見直す作業が急務となっている。ルッジウによれば、七年戦争を通じて、ショワズールはヌヴェル＝フランスやインドのような広大な植民地の維持のむずかしさを痛感した。それを継承しようとするイギリスに危惧の念さえ抱いている。領域的な植民地帝国の道を断念した彼は、むしろ島々や商館といった小さな植民地を本国と結びつけるやり方、つまり、本国と植民地間の支配＝従属関係を強化しつつ、収益や効率を重んじる植民地システムに活路を見出そうとした。カリブ海のサン＝ドマングや、インド洋上のフランス島とブルボン島への肩入れはその典型である。大きいだけ

の植民地は無用で、領土欲は封印された。スペインにルイジアナを気前よく譲渡したのもその延長線上にある。このようなショワズールの意思を受け継いだ外務卿ヴェルジェンヌは、フランスがアメリカ独立戦争に参戦したとき、カナダ再征服というフランスの領土欲を早々に打ち消し、あくまで独立運動を支援するための義挙であると訴えた。

話をカナダ征服戦争に戻し、最後に、カナダの割譲がフランスの人々にどのように受け入れられたかの問題を検討しておきたい。その点でよく引用されるのが、ヴォルテール『カンディード』(1759年)の一節である。「二つの国はカナダの辺りで数アルパンの雪に覆われた土地のために戦争をしています。それに両国はカナダ全土の値打ちよりもはるかに多額の経費をくだらない戦争につき込んでいます」。彼は『習俗論』(1753年)でも同じような発言をしている。「カナダは雪と氷に1年の8カ月間覆われ、野蛮人とクマとビーヴァーが棲む国です」。カナダの人口の低迷、経済の不振、統治経費の増大などを理由に、植民地の維持に否定的な見解は、ヴォルテール以前から少なくなかった。ペルノは、長期戦に飽きた人々が和平交渉の進展を好感し、1762年12月以降、和平を歓迎する祝祭行事が各地で催されたと述べている。

その反面、ヌヴェル＝フランスに対するイギリスの露骨な軍事行動は、フランスで嫌悪感を増幅させていた。元ヌヴェル＝フランス総督ラ・ガリソニエールは1750年の「意見書」で、カナダをフランス植民地の戦略的な「防壁」と位置づけ、イギリスの脅威に備えるよう政府に警告している。遅まきながら、ヌヴェル＝フランスでは、オハイオ川やミシシッピ川に沿って要塞線が強化された。しかも、最新の七年戦争史研究で知られるドジェムボウスキによれば、18世紀中葉は初期的な国民意識の高揚期にあたっており、ヴォルテール流のカナダ切り捨て論にすんなりと同意できる雰囲気ではなかった。

世論の動向からこの問題にアプローチするドジェムボウスキは、「Gazette紙」や、1755年以降に政府の支援で発行された新聞の言説分析を試み、次のような流れを確認した。すなわち、当初の記事はカナダの実情や存在価値を客観的に叙述していたが、戦局が悪化した1758年を境に激越な口調に転じた。「フランスが防衛を余儀なくされているのは、その財宝であり、その商業全体のゆえです。

フランスがアメリカで植民地を保持するか、すべてを失うかが問題なのです」(L'Observateur Hollandois紙、1758年8月1日付)、「皆さん、境界の問題は口実にすぎません。フランス人からアメリカの商業を奪い取ることが問題です」(État politique actuel de l'Angleterre紙、1758年9月16日付)といった類である。けれども1759年に入ると、交信の途絶でカナダの記事自体が不足し、イギリスの新聞記事や論説の翻訳で埋め合わせる始末だった。

その後、ケベック陥落のニュース(Gazette紙、1759年11月3日付)は、読者のショックを和らげるためか、本記事ではなく、「ロンドン」というコラム欄で間接的に扱われた。12月1日付の同紙は、「イギリス人は、わずか4軒しか残っていない廃墟のケベック市しか所持していません。彼らは以前と同じく五大湖を支配していません。彼らは国境の小さないくつかの地域を所持しているにすぎないのです」と強がっている。このあたり、イギリスのカナダ征服欲を誇張して読者の屈辱感や愛国心を煽り、あるいは、カナダの喪失を悲嘆する読者を慰撫する狙いがあったと、ドジェムボウスキは推論している。ショワズールがイギリスとの外交交渉の経緯を暴露する文書を公表し、自己の正当化をはかるとともに、カナダ割譲に関して世論の同意を求めたのは1761年秋のことだった。

この時期、すでに政府当局による世論操作がなされていたのは驚きだが、たとえば1760年、ショワズールが経営の思わしくない「Gazette紙」に代えて「Gazettes et Papiers anglois紙」の発刊を後押しした事実をみると、為政者は「言論」の力を恐れ、先手を打って世論の誘導や鎮静化をはかったのである。こうした高等戦術によってカナダ失陥への世論が和らいできたのを見定めたのか、1762年9月、ヴォルテールは外務卿ブララン(ショワズールの従兄弟)に宛てた手紙で「私は皆さんと同じで、カナダよりも平和をずっと愛しています。フランスはケベックがなくても幸せだと私は信じます」と記した。

6. カナダ征服戦争研究の意味

本稿はカナダ征服戦争の諸相を最近の研究をもとに概観してきた。もちろんこの小稿ですべてを言い尽くすことは不可能であり、それぞれの分野について

奥行き深い検証作業が肝要である。カナダに居住するフランス系の人々や先住民の行方に関心を持つ筆者としては、七年戦争以前から始まった「大混乱」(grand dérangement)と称されるアカディアの人々を襲ったディアスポラ劇を含めて取り組みたいと考えている。その点では、本稿ではやや軽視せざるをえなかったが、マチュー、アンボー、ヴォージョワといったカナダ人研究者の視線に注目する必要があるだろう。とくにマチューは、この戦争で約1,000人のカナダ人の死傷者、すなわち15家族に1家族の割合で犠牲者が出ていることを重視し、この戦争を「征服戦争」ではなく、「カナダ人の戦争」と呼んでいる。マチューは、従来からのフランスやイギリスの視点を超えて、戦争を生きたカナダ人の側から歴史を書き直そうとしているように思われる。

その一方、カナダ征服戦争を取り巻く世界への眼差しも重要で、本稿では七年戦争の経緯を絡め、とりわけショワズールの内外の政策に着目した。ショワズールが「対英復讐」の論者に留まったのか、それとも新たな植民地国家を標榜したのかは価値のある研究テーマである。彼が北米大陸に仕掛けた「時限装置」がその後の歴史をどのように動かしたのか、グローバルな視点からの考察が望まれる。

【参考文献一覧】

以下、本稿の作成にあたって参照した論考を参考文献一覧として記すが、筆者の都合により、本文中に注記はしない。なお、本文中の①～⑧に収録された論文の出所は、たとえば③の場合、(③)のように略記した。

L.Bély, *L'art de la paix en Europe : Naissance de la diplomatie moderne, 16^e-18^e siècle*, Paris, 2007.

id., "La dimension diplomatique d'une grande déchirure", pp.17-32, (⑦).

J.Black, "La Guerre de Sept Ans, un conflit mondial", pp.27-37, (④).

J.P.Bois, "Le traité de Paris de 1763", pp.403-418, (④).

S.Brumwelle, *Redcoats : the British Soldiers and War in the Americas, 1755-1763*, Cambridge UP, 2002.

- id., "La Guerre de Sept Ans à l'échelle mondiale", pp.49-57, (③).
- O.Chaline, "Le Canada dans l'affrontement naval franco-britannique lors de la Guerre de Sept Ans", pp.123-131, (③).
- id., "Bilan naval de la Guerre de Sept Ans", pp.83-105, (④).
- R.Chartrand, "La milice Canadienne", pp.291-300, (③).
- G. Chaussinant-Nogaret, *Choiseur : naissance de la gauche*, Paris, 1998.
- G.Despêches et D.Vaugeois (dir.), *Vivre la conquête : à travers plus de 25 parcours individuels*, Septentrion, 2013.
- E.Dziembowski, "Transparence ou désinformation ? la perte du Canada dans la presse gouvernementale française", pp.371-384, (④).
- id., *Un Nouveau Patriotisme français, 1750-1770*, Oxford, 2014.
- id., *Les Guerres de Sept Ans*, Paris, 2015.
- J.Dull, *La Guerre de Sept Ans : histoire navale, politique et diplomatique*, Bécherel, 2009.
- W.J.Eccles, *Essays on New France*, Oxford UP, 1987.
- B.Fonck, "Joindre au système de tactique d'Europe : l'usage à faire des Sauvages", pp.155-173, (③).
- B.Fonck et L.Veyssière, "Une histoire en héritage : nouvelles perspectives sur la fin de la Nouvelle-France", pp.9-20, (⑤).
- M.Fournier, "Les soldats de la Guerre de Sept Ans", pp.237-242, (③).
- G. Frégault, *La Guerre de la Conquête, 1754-1760*, Montréal, 1955.
- F.Guelton, "La Guerre de Sept Ans : le contexte français", pp.59-70, (③).
- G.Havard et C.Vidal, *Histoire de l'Amérique française*, Paris, 2003.
- A.Laberge, "Le 14^e colonie ? ", pp.75-81, (⑦).
- J.Lacoursière, *Histoire populaire de la Nouvelle-France*, 2 vol., Québec, 1995.
- L.Lépine, "Les stratégies militaires françaises et britanniques lors de la Guerre de Sept Ans", pp.133-153, (③).
- R.Lessart, "Les soldats de compagnies françaises de la Marine au Canada et à l'île Royale", pp.181-204, (④).
- B.Lesueur, "Les Antilles dans la Guerre de Sept Ans", pp.65-82, (④).
- P.Macleod, *La vérité sur la bataille des prises d'Abraham*, Québec, 2008.
- id., "Les Amérindiens et la Guerre de Sept Ans en Nouvelle-France", pp.301-307, (③).

- S.Manning, *Quebec : the Story of Three Sieges*, London, 2009.
- J.Mathieu, *Les plaines d'Abraham : le culte de l'idéal*, Septentrion, 1991.
- id., *La Nouvelle-France : les Français en Amérique du Nord, 16^e-18^e siècle*, PU de Laval, 2001.
- C.Mélisson, "Procurer la paix, le repos et abondance", pp.165-178, (④).
- L.Nerich, "Le système de défense de la Nouvelle-France face à la Guerre de la Conquête", pp.269-290, (③).
- id., "Violence et terreur dans la Guerre", pp.129-142, (④).
- F.Pernot, "En guerre pour quelques arpents de neige ver le Canada ? : accueil du traité de Paris en France", pp.419-432, (④).
- J.P.Poussou et als., *Espaces coloniaux et espaces maritimes au 18^e siècle*, Paris, 1998.
- J.P.Poussou, "Les débats entre historiens à propos de Montcalm, de Wolfe et de la victoire anglaise", pp.23-47, (③).
- id., "Les consciences économiques de la Guerre de Sept Ans", pp.433-448, (④).
- id., "Le commerce canadien des fourrures de la conquête anglaise du Canada", pp.362-376, (⑥).
- id., "Et si la Novelle-France n'avait pas été perdue? essai d'histoire contrefactuelle", pp.41-56, (⑦).
- H.Quimper, "Les batailles de Québec", pp.199-223, (③).
- F.J.Ruggiu, "Une relation tombée dans l'oubli ? Le Canada et la monarchie française entre 1759 et 1783", pp.449-473, (④).
- C.P.Stacey, *Quebec, 1759 : the Siege and the Battle*, Toronto, 1959 (2002).
- F.A.J. Szabo, *The Sevev Years War in Europe, 1756-1763*, Harlow, 2008.
- id., "Perdre l'Amérique en Allemagne", pp.39-63, (④).
- F.Ternat, "L'autre bataille de Québec : sauver la Nouvelle-France par la négociation ?", pp.71-91, (③).
- id., "Les enjeux géo-politiques internationaux", pp.107-124, (④).
- M.Trudel, *La Nouvelle-France par les textes*, Québec, 2003.
- L.A.Veyssière, "Louis-Antoine de Bougaville au Canada", pp.173-198, (③).
- id., "L'honneur de Montcalm", pp.143-162, (④).
- A.de Visme, "L'expédition de Terre-Neuve en 1762 ", pp.243-259, (④).

The Recent Trend of Study on the War of Conquest of Canada

Yujiro AGA*

Between 1754 and 1760, French and British troops fought bitterly in the Nouvelle-France for getting territory or seeking hegemony in the world. This war is now called “the French and Indian War” in Britain and “the War of Conquest of Canada” in France.

In 2009 and 2010, that is, in the moment of the two hundred and fiftieth anniversary of the war, several academic conferences of historical research were held in Canada and France in memory of the war, or rather, to reconsider and review it. As a result of discuss and reexamination, were published many collected papers in English and French, of which I have at least eight volumes. In this article, I’d like to survey and describe totally the process of the war by making reference to these papers and depending on other studies concerning the war. On this occasion, I tried to investigate the development of the war, taking especially notice of the problematiques proposed by J.P.Poussou, L.A.Veyssière, B.Fonck and J.Mathieu, who had made plans for organizing the academic conferences and compiled papers.

The conclusions are as follows. First, the incidents and the facts of the war itself are not always recognized or certified accurately. It is very difficult to remember and reconstruct the current and situation of the war because of lack of documents. There is, for example, no reliable source as to the reason why Montcalm, commander of the French troops, fought a battle against the British troops in the Abraham Plains on 13th September in 1759.

* Professor Emeritus, Osaka University of Foreign Studies

Second, it is said that France was defeated completely at the Seven Years' War and was obliged to cede the colonies including Canada to Britain by the treaty of Paris in 1763. But, on the whole, France recovered not only the Caribbean islands which Britain had occupied, but also the fishing rights off the Newfoundland, and so, the damage of France was limited to a minimum. In that respect, it is necessary to investigate the politics and the strategy of Choiseur, the Chief Minister of France, by comparing with those of Pitt, the Prime Minister of Britain. Choiseur couldn't understand to the end why Pitt persisted in possessing Canada. Choiseur is regarded, in general, as an advocate of balance of power in Europe and that of anti-Britannic revenge, but in this article, I pointed out his flexible and efficient system of colony after the war by taking into account the study of F.J.Ruggiu.

However, I couldn't give consideration to the proposition of J.Mathieu. His study has picked up mainly the Canadians who suffered from a great loss under the war. In fact, the number of dead and injured Canadian was over 1000, and the defiant Acadians were expelled from their country during the wartime. He calls this war, therefore, not "the War of Conquest", but "the Canadians War". We think this point of view is important for the study of the war in the future. At any rate, it is expected that the historians concerned will work in collaboration with each other, as there are many problems to be solved.